

女
水

白秋全集
17

詩文評論
3

白秋全集 17

第一〇回配本(第一期一と二四卷)

一九八五年九月五日 発行

定価四二〇〇円

著 者 北 原 白 秋

発行者 緑 川 亭

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
番 行 所 錦 岩 波 書 店

電話 〇三・五二二
振替東京六三三〇〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

『季節の窓』

はしがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・セ

十二月(大正十二年)・・・・・・・・・・・・・・・・二

王維・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三

雲畦先生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三

母の手習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・六

父の踊り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・六

叱られる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二〇

一月(大正十三年)・・・・・・・・・・・・・・・・三

孟宗と七面鳥・・・・・・・・・・・・・・・・二四

食卓の上・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二七

三月(大正十三年)・・・・・・・・・・・・・・・・元

日光について・・・・・・・・・・・・・・・・三〇

三月の言葉・・・・・・・・・・・・・・・・三〇

藪菟蕪・・・・・・・・・・・・・・・・元

茂吉の菟蕪ぐさの歌・・・・・・・・四一

須成の爺 その一・・・・・・・・三三

その歌(四)

電燈・・・・・・・・・・・・・・・・四六

四月(大正十三年)・・・・・・・・四七

四月の言葉・・・・・・・・・・・・・・・・四八

路の葉・・・・・・・・・・・・・・・・五一

路と露・・・・・・・・・・・・・・・・五三

童謡について・・・・・・・・・・・・・・・・五五

十方ぐれ・・・・・・・・・・・・・・・・五九

青雲出でぬ・・・・・・・・・・・・・・・・六〇

良寛の歌二首・・・・・・・・六二

早 蕨	三
をさなきもの	四
多作その他	五
私と歌	六
思無邪	七
若い人の歌	八
稚 拙	九
隆太郎の詩	一〇
笛消息	一一
五 月(大正十三年)	一二
五月の言葉	一三
一つの形式	一四
梅の実	一五
内容と形式	一六
口語歌について	一七
口語歌の持ち味	一八
差別と調和	一九

行わけのこと	101
棕櫚の葉	102
紫蘇の実	102
歌壇意識について	103
自己毀損について	110
潔癖と決量	111
作品の発表について	111
態度の表裏	113
友人としての節義と操守	116
英雄	117
書斎	118
須成の爺 その二	111
もちろん	113
父の葉書	114
カルピス募集の童謡の選後に	115
月(大正十三年)	111
雑草の季節	112

蟻の牧童	二二
さび	二九
胡桃	四〇
芭蕉とその周囲	四二
眞蹟	四四
天才	四六
振幅	四九
批評について	五一
批評家の資格	五四
型と心法	五六
芸術の生采	五七
批評心理の種種相	五九
月評について	六二
阿諛	六四
大名	六五
贅物	六六
境涯	六九
緑草心理	七〇

態度	一三
環境	一四
独善	一五
小品の依頼について	一七
短冊その他について	一七
童謡制作の弁	一八

七月(大正十三年)	一八
-----------	----

連吟	一八
独吟	一八
口語歌調の考察	一八
各句の比例	一九
須成の爺 その三	一九

八月(大正十三年)	一九
-----------	----

最近歌壇総覧	一九
一 アララギ(一九)	一九
二 創作(二四)	一九
三 潮音(三〇)	一九
四 国歌(三一)	一九

五 霸王樹(三四)	九 橄欖(三六)
六 自然(三六)	一〇 こぎやう(三七)
七 香蘭(三三)	一一 短歌雑誌(三六)
八 とねりこ(三四)	一二 明星(三二)

素質に就て	二五
立秋の丘より	二六
火星の近づく頃	二四〇
簡素な玩具	二四三

九

月(大正十三年)	二四九
芙蓉の庭	二五〇
雲助の隠居	二五五
汽車	二六二
ゐねむり爺さん	二六八
根つ株	二七二
虫の訪客	二七七
竹を観ながら	二八二

十月(大正十三年) 二六五

九州風俗 二六六

みふし語り(二六)

豊後浄瑠璃(二六)

竹林の十月 二六三

多作と寡作 二六六

消息 二六七

十一月(大正十三年) 二九〇

木兎の家から 二九〇

言 霊 二九二

日本の子供たちに 二九三

隆太郎の詩と註 二九七

詩壇と文壇 三〇六

十二月(大正十三年) 三二七

鴨の季節 三二八

豆 柿 三三〇

蜜柑山散策 三三三

竹林の茶飯	三三
原稿難のこと	三七
彼は眼である	三九
騒壇の論議について	四一
どうどうめぐり	四三
古人と今人	四五
詩歌は生れる	四七
元 義	四七
芭蕉と良寛	四八
特許局と新案登録	五〇
ペラホ物語	五一
吉植の小父さん	五三
談片いろいろ	五六
紐 鞭(三六四)	
桃太郎(三六四)	
子売り爺(三六五)	
泥棒市場(三六五)	
渡り鳥(三六六)	
水 葬(三六六)	
石(三六七)	
密集する人人(三六七)	
最後の五分間(三六八)	
頭梁の話(三六九)	

明治天皇御製 三七〇

「風・光・木の葉」の詩人に 三六一

春を待つ 三六一

巻末に 三九五

『風景は動く』

風景は動く 四〇三

風景は動く その一 四〇五

篇 四〇六

短歌と新風 四一二

野山の花 四一四

このごろの花 四一七

蘇 枋(四一七) 藪薊蕩(四一〇)

山 吹(四一八) 水 仙(四三二)

胡蝶花(四二〇) 緋桃と木莓(四三三)

沙羅の木(四二六)

隆太郎の詩と註	四三
新緑	四二
輝く空気	四一
蛇経	三八
犀牛の如くせよ	四〇
コーカーリカ比丘	四三
婆羅門	四五
牧牛士	四六
五月中旬	四九
空気万歳	五一
黄金の鷹と蓮華と菓子	五三
鳩来る	五六
白い家禽	五七
七面鳥(四七)	
鶏(四六)	
古問屋の正月	四七
揺れてる書斎	四八
季節の梅	五〇

風景は動く　その二	五〇九
-----------	-----

現代日本の詩歌	五一〇
---------	-----

『子供の村』巻末に	五二八
-----------	-----

新童謡と教育	五三二
--------	-----

『思ひ出』増訂新版について	五三三
---------------	-----

『日本童謡集』序	五三三
----------	-----

『桐の花』増訂新版について	五三八
---------------	-----

『現代日本詩選』後記	五四四
------------	-----

『二重虹』巻末に	五四八
----------	-----

建国歌	五五二
-----	-----

民謡について	五五七
--------	-----

『からたちの花』の序	五五九
------------	-----

風景は動く　その三	五六一
-----------	-----

利玄の歌	五六二
------	-----

利玄の歌について	五六五
----------	-----

古泉千樫の歌	五六六
--------	-----

『海山のあひだ』合評より 五二

『原生林』合評より 五六

白秋一家言 五九

道 五九

師弟 五九

歌会 五九

修業 五九

辞書 五九

他流 五九

礼節 五九

批評と示教 五九

謙譲 五九

先輩 五九

先進と後学 五九

先発 五九

自他の位置 五九

知ると知らぬと 五九

